

近代スポーツ・メディアとアジア民族に関する覚書

—民族スポーツとして格闘技の検証に向けて—

石 井 隆 憲
三 沢 伸 生

1. はじめに

戦後日本における独自の民族スポーツ生成過程において、テレビが主流を占めるまでのあいだ新聞・雑誌を中心とする近代メディアの果たしてきた役割は極めて大きい。

松浦が指摘するように、近代メディアは単にメディア本来の機能としてスポーツを報道するだけに留まらず、野球やサッカーといった近代スポーツに関して自社の名前を冠するチームを保有したり、さらには自らがメディア・スポーツ・イベントを企画・運営することで民族スポーツを創造・発展させてきた。⁽¹⁾

現在、ギネス・ブックから発行部数として世界一を認められている『読売新聞』の隆盛が、スポーツと密接な関係にあることは衆目の一致するところであろう。

また歴史的にみても近代メディアと民族スポーツの相関関係を確認することができる。たとえば近代日本社会に外来語である「スポーツ」の語を定着させたのは、1923年に本邦初のスポーツ・グラフィック誌として創刊された『アサヒスポーツ』であったことはあまりに有名である（巻末写真参照）。⁽²⁾

しかし、こうした近代スポーツ・メディアの研究において、日本の民族スポーツ生成におけるアジア民族の役割に関して植民地問題以外はほとんど検証がなされてきていない。

本稿は、こうした問題意識に立脚しながら、近代スポーツ・メディア研究の指針を明確にすることを目的とする。

2. 格闘技をめぐる視座

世界各国とりわけ非ヨーロッパ諸国の民族スポーツにおいて、格闘技は旧来からの古典的 민족スポーツとして、ヨーロッパ伝来の近代スポーツと対をなす形で共存し発展・継続している。アジア諸国に関していえば、韓国のテコンドー、タイのムエタイ、トルコのヤール・ギュレシュ (yağlı güreş)、日本の相撲などがその良い例である。⁽³⁾

これらの国々において、20世紀以降、野球やサッカーに代表される近代スポーツが大いに発展し、現在でも幅広い支持を集めている。その一方で格闘技に関しては、古典的伝統格闘技が、「民族の誇り」、「国技」、「お家芸」として、何より筆頭にあがり、レスリングやプロレスのようなヨーロッパ伝来の近代スポーツとしての格闘技は、オリンピックのような国際大会を別として、国内においては近代スポーツではあってもそれほど注目されてきたわけではない。

さらにプロレスに関しては、その興行における演出をめぐって、スポーツでありながら、スポーツ・メディアにおいては一種の際物扱いを受け、一般メディアにおいては報道が手控えられる状況に追いやられている。

しかし戦後日本において、相撲出身の力道山がプロレスの盟主として、熱狂的な大衆の支持を獲得し、戦後日本のスポーツ文化を牽引し、決して無視し得ない社会現象を生んだことは否定することはできない。その延長で今日では相撲の頂点たる横綱、柔道の金メダリストが、プ

ロレスを核とする格闘技に進出し、この分野において古典的伝統スポーツと近代スポーツが渾然一体となって、新しいスポーツのあり方を形成している。

前述のように、格闘技は古典的民族スポーツの影響から、ナショナリズムが先鋭的に表面化する。それゆえに吉見が提唱するように、身体文化とりわけスポーツする身体とナショナリズムの関係は、格闘技においても検証されなくてはならない課題である。⁽⁴⁾スポーツ史において身体がいかに近代化したかという問題は、近代スポーツの形成において最も注目を集めている。

他方、同時に古くから指摘されるスポーツにおける大衆動員と国家戦略という視座も、その有用性を継続しており、依然として検証する必要があるものである。戦前期において見られた植民地主義とスポーツ文化の拡大は、⁽⁵⁾形を変えながらも存続している。戦後においてもプロレスと同じく、ときにスポーツであるのか興行であるのかの議論を招くボクシングに関して、日本と東南アジアとの関係から考察した（乗松 2010）のように、格闘技をめぐる、身体と同じく国家・民族・政治が重要な要素であることも指摘されてきている。

3. アジア諸民族の役割

前述のように、近代スポーツが伝播先となる地域の独自の文化と融合し、いわゆる近代スポーツの民族スポーツ化、もしくは民族スポーツの生成が見られるわけだが、このような視座を持って格闘技を「民族スポーツ」としてスポーツ研究の俎上にとりあげる事例が陸続として輩出している。

思想研究誌の中でも定評のある『現代思想』は2002年の増刊号においてプロレスの特集を組み、（小泉 2002, 流・澤野 2002, 高部 2002）のように、プロレスの様々な側面を、取り上げて分析を試みている。

しかしながら、同特集において戦後直後において日本のプロレスを牽引したアジア諸民族の

存在・役割が必ずしも十分に言及・検証されていたとは言い難い。

戦後直後の日本におけるプロレスないしその前身の1つである柔拳道（柔道、拳闘の異種間格闘技）において、アジア諸民族も日本人と同じく大きな役割を果たしてきた。とりわけユスフ・トルコに代表される在日タタール人（タタール系トルコ人）選手たちは、ときにアメリカ人選手、ときにソ連人選手と己の民族出自を偽り、敵役・悪役を演じつつ、日本人選手のヒーロー誕生を幫助して敗戦直後における観客たちの憤懣解消とプロレスが「大衆的」民族スポーツの座を占める上で大いに貢献してきた。⁽⁶⁾

今日、歴史学研究・地域研究によって、戦前・戦中期の在日タタール人の存在が解明されてきているなかにあつて、スポーツ研究、とりわけスポーツ人類学が、こうした諸学と連携して、近代日本で生成されてきた民族スポーツにおける在日タタール人はじめアジア民族の役割を解明していくことが必要である。

4. 結びにかえて

在日タタール人に代表されるようにアジア諸民族が、近代日本において格闘技を近代スポーツから民族スポーツへと独自の生成を遂げる上で大きな役割を演じてきた。こうした歴史的事実を前に、筆者らは研究プロジェクトを組織して、今日提唱されているスポーツ研究をめぐる様々な視座に立脚して、具体的には公的研究機関に所蔵が少ない『アサヒスポーツ』や『スポーツ毎日』などのスポーツ・グラフィック誌や、新聞など近代メディアを分析・データベースを構築しながら研究を進めつつある。また在日タタール人のように、既に日本を離れていたり、当事者・関係者が物故・高齢化している状況においては関係者への聞き取り、日記・書簡・写真などの私文書史料の探索・分析が急務である。

* 石井隆憲（東洋大学ライフデザイン学部教授）

* 三沢伸生（東洋大学社会学部教授）

※本稿は、東洋大学学術推進センター・研究所プロジェクト研究助成金に基づく、研究課題「近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割」【拠点：東洋大学アジア文化研究所，研究代表者：石井隆憲，平成23～25年度】の研究成果の一部である。

<参考文献>

- * 石井隆憲・三沢伸生 2010. 「戦後日本におけるトルコ（タタル）系格闘技選手に関する覚書」『アジア文化研究所研究年報』44, pp.335-340.
- * 石井昌幸・金光誠2004. 「植民地主義とスポーツ文化の拡大」『スポーツ人類学』（宇佐美隆憲：編）明和出版, pp.64-72.
- * 宇佐美隆憲：編 2004. 『スポーツ人類学』明和出版.
- * 小泉悦次 2002. 「もう一人の力道山たち」『現代思想』30-3, pp.265-271.
- * 小島貞二 1957. 『日本プロレス風雲録』ベースボール・マガジン社.
- * 寒川恒夫：編 2004. 『教養としてのスポーツ人類学』大修館書店.
- * 高部雨市 2002. 「小人プロレスの憂愁」『現代思想』30-3, pp.122-132.
- * トルコ，ユセフ 1982. 『俺は日本人だ!!』ジャパン・プロレスリング・ユニオン.
- * 流智美・澤野正樹 2002. 「プロレス史の遠近法」『現代思想』30-3, pp.218-231.
- * 乗松優 2010. 「岸信介の東南アジア政策とスポーツ：プロボクシング「東洋チャンピオン・カーニバル」を中心に」『スポーツ社会学研究』18-1, pp.83-94.
- * 寶學淳郎 2002. 「スポーツとメディア」『現代メディアスポーツ論』（橋本純一：編）世界思想社, pp.3-24.
- * 松浪稔 2007. 「日本におけるメディア・スポー

ツ・イベントの形成過程に関する研究：1901（明治34）年時事新報社主催「十二時間の長距離競争」に着目して」『スポーツ史研究』20, pp.51-64.

* 松浦稔 2010. 『身体の近代化：スポーツ史からみた国家・メディア・身体』叢文社.

* 吉見俊哉 1999. 「ナショナリズムとスポーツ」『スポーツ文化を学ぶ人のために』（井上俊・亀山佳明：編），pp.41-55.

* 渡辺潤 1999. 「スポーツとメディア：アメリカのプロ・スポーツを中心に」『スポーツ文化を学ぶ人のために』（井上俊・亀山佳明：編），pp.57-74.

<註>

- (1) 例えば，松浦 2007, 2010など近年の研究成果を参照のこと。
- (2) 『アサヒスポーツ』は，四六4倍判，表紙とも32頁，総グラビア印刷，定価30銭で毎月2回発行された。
- (3) また日本においては明治以降に嘉納治五郎を中心に古来の柔術を基に整備された柔道も相撲と同様に伝統的民族スポーツの地位を確保している。
- (4) 吉見 1999：43.
- (5) 石井・金光 2004に詳しい。
- (6) ユセフ・トルコ自身が断片的ながら自伝（トルコ 1982）を残しているほか，交友関係にあった小島貞二などの選手の著述（小島 1957）から，在日タタル人選手の実在・役割を見出すことができる（石井・三沢 2010参照）。

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割



三五五

『アサヒスポーツ』第1巻6号（1923年6月）表紙

※第6回極東競技大会特集号。表紙の写真から、陸上競技という近代スポーツにおいて、競技者として、既に日本人だけでなくアジア諸民族の存在が意識されていることがうかがえる。